

看護師が通常学校特別支援教育支援員として従事することの貢献可能性と課題 ー連絡ノートの分析を通してー

本多祐子

東京福祉大学 教育学部(伊勢崎キャンパス)

〒372-0831 伊勢崎市山王町 2020-1

(2014年7月14日受付、2014年10月9日受理)

抄録: 通常小学校において、看護師である特別支援教育支援員が携わった連絡ノートの記述内容を分析し、特別支援教育に看護師が携わることの貢献可能性と課題を考察した。その結論は次の通りである。支援員は、意図的な「観察」を通して児童の健康の保持増進と安全確保への能動的な関わりができる。そして、セルフケア能力を踏まえつつ、児童の障害の状況に応じた生活習慣確立を目指しながらの日常生活上の介助の点においても貢献できる部分が大きい。また支援員は、障害や伴う生活上の困難さが理解できる立場ながら、学校教育の目標や学校組織活動の仕組みに関する知識は浅い。この課題解決と共に、教師らによる児童らの学校における学習生活上の支障の捉え方や、教育課程の中で習得を目指す力を積極的に把握する努力が求められる。そして、看護者として携わる使命と地域看護の一部を担う認識のもと、教育活動が円滑になされるための支援に携わる必要がある。

(別刷請求先: 本多祐子)

キーワード: 特別支援教育支援員、看護者の責務、学校教育の目標、学校看護

緒言

共生社会の形成に向けて、我が国ではインクルーシブ教育システムの理念の浸透とその具現化に向けた特別支援教育が急務とされている(文部科学省2012)。また、社会福祉士および介護福祉士法の一部改正により、2012(平成24年)4月より、一定の研修を受けた介護職員等が一定の条件のもとにたんの吸引等の医療的ケアができるようになったことに伴って、特別支援教育に携わる教員もその実施が制度上可能となった。通常学校においては、介助員等の介護職員が特定行為を実施し看護師等が巡回する体制等の想定も可能となったが、「学校と保護者との連携協力を前提に、原則として看護師等を配置又は活用しながら、主として看護師等が医療的ケアに当たり、教員等がバックアップする体制が望ましい」とされている(文部科学省, 2011)。しかし、清水(2014)の全国調査によると、通常学校で医療的ケアに関わる看護師は、非正規雇用で特別支援教育支援員の業務を兼務する学校が46.3%であり、医療的ケアの実施と特別支援教育をサポートする業務も求められ、研修や相談の場やロールモデルの存在の少なさに伴って困難を抱えやすい状況にあることが指摘されている。一方で、周産期医療の進歩や在宅医療の推進等に伴って、

「医療的ケア」を受けながら通常学校に就学する児童が増加する傾向が予測できる。看護師が地域において力を発揮していくことが専門職内外から望まれていることを踏まえると、学校という場も看護活動の展開の場の一つとして、より認知されていく必要性が高まりつつある。

なお、特別支援学校における看護師の職制や課題に関する研究は蓄積されつつあるが、これらは「看護師が学校で看護を担う上での課題」を追究する立場にある。例えば泊ら(2012)は、医療的ケアを担う看護師が特別支援学校で活動する困難と課題について研究し、教育の場における看護師に役割の不明確さや子どもの見方の違い、看護師・教員・養護教諭の連携・協働に関する課題の存在と、学校で看護の専門性を発揮するための体制の必要性等を報告している。一方、特別支援教育支援員(以下「支援員」と略す)として看護師が従事した事例からの研究や、「看護師が教育を支援する上での課題や可能性」を追究する立場に立つ研究は研究者が調べた限り見当たらない。したがって、本研究ではここに着目し、看護師であるがゆえの特別支援教育への貢献可能性と課題に関して追究することとした。

今回、通常小学校において、当自治体で初めて試みられた教育体制の中で、看護師免許を有する「特別支援教育支援員」らが、その役割と責任を模索しながら携わった事例

に遭遇した。この模索の経緯を記した連絡ノートの記述内容を分析することを通して、特別支援教育に看護師が携わることの貢献可能性と課題について考察したため、ここに報告する。

本研究では、次の2点を目的に、「看護師免許を有する支援員」がその役割や責務を模索しながら取り組んだ経緯の分析を通して、特別支援教育と看護の観点から考察した。すなわち第1に、通常学校において看護師が「特別支援教育支援員」の職務を担う責任がある中で、支援員として従事することの特別支援教育への貢献可能性と課題を見出すことを目的とした。第2に、看護師が学校という教育の場において、支援員として児童にかかわることの「看護」としての意味を見出すことを目的とした。

なお、本研究で扱ったデータは、支援員らの職務経歴や教育背景等に伴う影響、学級や教職員の状況による影響等による偏りがあることを踏まえると、一般化できるものではない。この限界を認識しつつ、試みとして少ない教育体制の中にある一事例の分析を通して、今後の教育および看護の可能性や課題を検討する上での一資料として提示することを目指した。

研究方法および分析対象

連絡ノート

医療的ケアを要する児童が在籍する特別支援学級を有する通常小学校において、交代制で勤務する看護師免許を有する特別支援教育支援員複数名が1年間記述した連絡ノートを帰納的に質的分析した。なお、当自治体におけるこの支援員の体制は初めての試みであり、支援員間の連絡ノートも非公式でフォーマットもないものであったが、それゆえに、互いが伝え合う必要性を認識した情報として記述した内容が表現されていることが仮定できた。

なお、分析対象としたノートを記述した支援員の勤務体制や特別支援学級の状況の概要は次の通りである。医師の指示(「たんの吸引」および「気管カニューレの管理」)に基づいた医療的ケアを要する児童1名を含む特別支援学級を有する通常小学校で、看護師資格を有する支援員複数名が、延べ1名勤務となるよう交代制で勤務している。

分析手続き

分析の手続きとしては、項目のない記載内容に項目名をつけてデータ化した上で、類似するデータをカテゴリー化し、それに命名する作業を繰り返した。なお項目のない記載内容に項目名をつけてデータ化する作業は支援員が行い、カテゴリー化する作業は第三者の研究協力者と、研究

者で互いの見解が一致するまで行った。最終的にカテゴリー化したものを支援員に提示し、実際のとの矛盾がないことを確認してデータの妥当性を検討した。そして、データの傾向を、文部科学省初等中等教育局特別支援教育課(2007)の指針『「特別支援教育支援員」を活用するために』における『「特別支援教育支援員」の具体的な役割』に基づいて研究者が質的に分析した。さらに、日本看護協会(2007)が示す「看護の目的」および「看護の機能」に基づいても分析した。その上で、以上の結果と文献に基づきながら、学校における看護の意味や教育への貢献可能性と課題について論究した。

倫理的配慮

研究の趣旨と倫理的配慮の方法について、分析対象としたノートを記した支援員に対面および文書で説明し、承諾を得た上で研究を進めた。また、ノートの記載内容を項目名としてデータ化することで児童や教職員の個人情報特定できないようにした。そして、支援員が項目名としてデータ化する場合、ノートの記載内容から、児童や教職員の個人情報や学校の機密事項に触れる記載内容は削除して行うよう依頼した。さらに、論文化する時点で支援員の勤務体制や特別支援学級の状況に若干の修正を加えるとともに、本研究の趣旨に不必要な情報については記載していない。以上の方法と倫理的配慮のもとで研究を進め、公表する予定であることについて、分析対象のノートを記述した支援員が勤務する学校に、対面および文書で説明し、承諾を得た。

結果

1) 支援員間連絡ノート記述内容をカテゴリー化した結果

データをカテゴリー化した結果を表1に示す。以下、カテゴリーを『 』、サブカテゴリーを【 】、下位カテゴリーを〔 〕で示し、支援員が項目化したデータを〈 〉で示す。

支援員が連絡ノートに記載した内容は、『学校生活の流れにおける児童の状態』、『特別支援学級の児童の生活を支援する上で必要な情報』、『学校組織の一員として携わる責任上必要な情報』の3のカテゴリーと、【学校の動き】、【児童の学習生活・学校生活上の気づき】、【基本的生活習慣確立への支援上必要な情報】、【身体的管理上必要な情報】、【情緒面での支援上必要な情報】、【社会性構築への支援上必要な情報】、【医療的ケア対象児の医療的ケアに関する情報】、【通常学級の児童への対応に必要な情報】、【特別支援学級担任との連携内容】、【担任の他の職員との連携内容】の10のサブカテゴリー、36の下位カテゴリーで構成され

表1. 支援員間連絡ノート記述内容のカテゴリー化

カテゴリー	サブカテゴリー	下位カテゴリー	支援員が項目化したデータ
学校生活の 流れに おける児童 の状態	学校の動き	学校行事に関する動き	学校行事の予定と支援学級児童の動きの予定 学校行事に向けた学校の準備の動き 学校行事の際の教師と支援員の動き
		交流学級に関する動き	交流学級の授業内容・学習課題 交流学級担任による学級児童全体への指示内容
		特別支援学級に関する動き	特別支援学級担任の「朝の会」の内容・方法 特別支援学級の学外交流に関する内容 担任が課している学習課題・進捗状況
	児童の学習生活・学校生活上の 気づき	児童の学業への取り組み状態	集中力の持続の程度 児童が気になる周囲の状況 児童が楽しんで取り組むことができる課題 児童が取り組みやすい学習課題
		児童の学力に関する状態	児童が書けるようになった文字 児童が話せるようになった言葉 確認できた児童の理解度
		児童の課外生活の送り方	児童の関心事 課外と授業時間との切り換え状況 児童の危険行動 「気を付け」などができる程度
		児童の礼儀・マナー・規律遵守状態	児童の挨拶ができる程度 児童の言葉づかい 児童の身振判断の状況 児童の態度・態度
		児童の反応や変化	児童が守れるようになった規範 児童ができるようになった学習課題 児童がひらいてできるようになった学校生活上の行動
			衣服の着脱に介助を要する状況 衣服の片づけができる程度 ハンカチ・ティッシュの携帯状態 手洗いの状況 給食時の食器を扱う動作の状態 歩行・姿勢の安定の程度 排尿時間の間隔 排泄行動の自立の程度 児童の衛生管理行動の状況 児童の危険回避行動の状況 児童が困難な動作・可能な動作の状態
	基本的な生活習慣 確立への支援上 必要な情報	日常生活動作の自立の程度	学内・家族の感染症発症状況 熱中症予防の必要性を感じた状況 湿度・温度に関する状況 事故予防の必要性を感じる児童の行動 アレルギーのある児童の予防対策 欠席・遅刻・早退の状況とその理由 給食の摂取量 給食時の嚥下状態 観察した外傷の状態・皮膚の変化の状態 児童の体調・表情の変化・要因 水分の摂取状況 受療・服薬の状況 児童のバニック時の言動 児童がバニックになった要因・きっかけ 児童の落ち着きの程度 児童が落ち着いた要因 児童の不安要因 児童の怒りの要因 児童の退行現象・甘えの状況 児童の危険行動に関する認識の状況 ほめてあげたい児童の言動 怒ると落ち着いた児童の状況 失敗感を未然に防止する言葉かけ なぜよくないのか？考えさせた状況 児童に伝えた支援員の感情 相手の気持ちを考えさせた状況 児童が落ち着いた支援員の言動 他児童に危害を加え得る行動 影響し合う支援学級内児童間の行動 支援学級内での児童間のやりとり 交流学級における児童間のやりとり 児童間のトラブルの要因 児童同志が仲良くできたときの状況 児童間に協力を得た内容 相手の気持ちを考えさせた状況 言葉づかいに関する忠告 特別支援学級児童に対する通常学級の児童の関わり方 児童間の謝罪の促し 児童との約束事 児童間で取り決めたルール 言葉づかいに関する忠告 危険行動への忠告 下品な行動に対する忠告 医療的ケア対象児の療の量・性状・吸引が必要な程度 医療的ケア対象児の学校生活・活動の状況と身体の変化の状態 医療的ケア対象児に対する呼吸の他の身体の変化の状態 医療的ケア対象児の保護者からの情報（家庭等における状態） 吸引時の医療的ケア対象児の言動 吸引を求める医療的ケア対象児の行動 医療的ケア対象児の保護者の付き添いの状況 感染予防行動に関する医療的ケア対象児の状況 医療的ケア対象児の受診予定 医療的ケア対象児の受診結果（保護者からの情報） 吸引器の状態 吸引の他の医療的ケア対象児に対する医療行為に関する内容 支援員が医療的ケア対象児の側を離れる際の対応 医療的ケア対象児の保護者の付き添いの状況 医療的ケア対象児に危害を加え得る他児童の行動 医療的ケア対象児の自立を妨げ得る他児童の言動 医療的ケア対象児に対する他児童の協力状況 緊急時に医療行為を要する通常学級在籍児童の存在 緊急時に医療行為を要する通常学級在籍児童に対する支援員の対応方法 養護教諭不在時に緊急対応した通常学級児童への対応 通常学級の児童対応に関する看護教諭との相談内容 通常学級の対応を要する児童の情報 交流学級にいる支援対象児の他の児童の身体状態 通常学級の児童が特別支援学級児童に与える影響 児童の危険行動と事故防止対策 児童との間で決めたルール 児童の個人情報保護のための一貫した言動内容 担任が児童に課している課題 担任が捉えている児童の関心事 担任が気をつけている児童への関わり方 教室の物理的環境 医療的ケア対象児の身体状況 児童から得た家庭での状況に関する情報 保護者から得た児童の状況 保護者の医療行為に関する考え 交流学級で行われていることと児童の状況 児童の学習上のつまづき部分に関する支援員の気づき 支援員が捉えた児童の危険な行動 吸引の他の医療行為に関する内容 保護者との相談内容 保護者の考え・希望・相談内容 児童ができるようになったこと 学習内容に関する児童の理解度 学習課題に対する児童の取り組み姿勢 担任から支援員への褒め・謝罪の言葉 担任の思案内容・大変さ・疲労状況 児童の能力や変化に対する感嘆 教諭でない支援員ゆえの不安 児童への対応方法の不透明さ 支援員の疲労感 至らなさに関する申し訳なさ 児童の努力・能力や変化に対する感嘆 特別支援対象児に関する他児童への説明内容 交流学級での学習内容・課題・進捗状況 授業・行事の際の特別支援学級児童の動き・配慮 交流学級に在籍する児童の状況 特別支援学級児童の変化に関する特記事項 医療的ケアを要する児童と支援状況に関する報告 特別支援学級児童への担任の他の教職員支援体制 通常学級の児童に対する対応 支援員の勤務体制に関する相談 医療的ケア対象児の状態と支援状況に関する報告 特別支援学級児童の外傷の報告・観察依頼 支援員が対応した通常学級他クラス児童への対応の報告 学校行事の際の養護教諭と支援員の役割分担 健康・物品・物品配置に関する内容 学習に集中しなくなる特別支援学級の教室の環境 安全に配慮した特別支援学級の教室の環境 状況に応じた児童間の物理的距離の必要性 児童対応の方法・一貫性の必要性
特別支援 学級の児童の生活 を支援する 上で必要 な情報	身体管理・ 支援上 必要な情報	罹患・受傷のリスクに関する情報	
		児童の身体の状態 (医療的ケア対象児に限らない)	
	情緒面での 支援上 必要な情報	不安定な児童の状況と影響要因	
		児童との情緒面でのかわり	
	社会性構築への 支援上 必要な情報	児童間のやりとりの状況	
		児童間の関係性に関する内容	
		児童への忠告内容・約束事	
		医療的ケア対象児の身体の状態	
学校組織 の一員として 携わる 責任上 必要な情 報	医療的ケア対象 児の 医療的ケアに 関する情報	医療的ケア対象児の自己管理行動	
		医療的ケア対象児にまつわる医療に 関すること	
		医療的ケア対象児支援の協力体制	
		医療的ケア対象児周囲の児童に関する こと	
	通常学級の児童 対応に 必要な情報	医療行為を要する通常学級在籍児童 への対応	
		養護教諭不在時の通常学級の児童 の保健室対応	
		通常学級の児童の心身状態	
	特別支援学級 担任との 連携内容	特別支援学級担任からの依頼	
		特別支援学級担任の考え	
		支援員から特別支援学級担任に伝え た児童の情報	
		特別支援学級担任と相談・検討した 内容	
		特別支援学級担任の心境	
		特別支援学級担任と相談した支援員 の心境	
		交流学級担任との報告・連絡・相談 内容	
担任の他の職員 との連携内容	教頭・校長との報告・連絡・相談内 容	特別支援学級児童に関する特記事項	
		養護教諭との報告・連絡・報告内容	
	教頭・コーディネーター・教育委員 関係者からの助言内容	特別支援学級の教室の環境	
		安全に配慮した特別支援学級の教室の環境 状況に応じた児童間の物理的距離の必要性 児童対応の方法・一貫性の必要性	

た。【児童の学習生活・学校生活上の気づき】には、〔児童の学業への取り組み状態〕、〔児童の学力に関する状態〕、〔児童の礼儀・マナー・規律遵守状況〕などが含まれ、『特別支援学級の児童の生活を支援する上で必要な情報』には、〔日常生活動作の自立の程度〕、〔児童の身体の状態〕、〔児童との情緒面でのかわり〕、〔児童間の関係性に関する内容〕、〔医療的ケア対象児の自己管理行動〕などが含まれた。『学校組織の一員として携わる責任上必要な情報』には、〔通常学級児童の心身状態〕、〔特別支援学級担任の考え〕、〔教頭・校長との報告・連絡・相談内容〕などが含まれた。

2) データおよび1)の結果を『「特別支援教育支援員」の具体的な役割』の視点で分析した結果

データおよび1)の結果を、文部科学省初等中等教育局特別支援教育課(2007)の指針『「特別支援教育支援員」を活用するために』における『「特別支援教育支援員」の具体的な役割』に基づいて分析した結果は次の通りである。

①基本的生活習慣確立のための日常生活上の介助

サブカテゴリーとして【日常生活習慣確立への支援上必要な情報】が挙がり、下位カテゴリーとして〔日常生活動作の自立の程度〕、〔児童の自己管理行動〕が構成している。そして、支援員が項目化したデータには、〈衣服の着脱に介助を要する程度〉、〈給食時の食器を扱う動作の状態〉、〈排泄行動の自立の程度〉、〈児童が困難な動作・可能な動作の状態〉などと児童の日常生活の介助と自立支援上で必要な項目が具体的に挙げられている。さらに、〔医療的ケア対象児の自己管理行動〕には医療的ケア対象児の〈気管カニューレ周囲の扱いの状況〉、〈感染予防行動に関する状況〉等の項目があり、医療的ケア対象児にはこれを含んだ生活習慣確立への支援の必要性の認識ゆえに情報交換がなされたと捉え得る。

②発達障害の児童生徒に対する学習支援

支援員が項目化したデータには、学習上の障害の特性に応じてどのような方法で学習支援をしたのかに関する項目は見当たらない。しかし、〔児童の学業への取り組み状態〕、〔児童の学力に関する状態〕の下位カテゴリーがあり、〈児童が書けるようになった文字〉、〈児童が話せるようになった言葉〉、〈児童が取り組み難い学習課題〉、〈児童の学習上のつまづき部分に関する支援員の気づき〉等、児童の学習上の困難性や学習成果に視点が向けられた項目により構成されている。また、〈集中力の持続の程度〉、〈児童が楽しんで取り組むことができる課題〉等、学習に関連する発達障害ゆえの行動傾向が情報交換されたことが捉え得る。

③学習活動、教室間移動等における介助

児童の学習活動を円滑にするための介助に必要な情報と捉え得る、〔交流学級に関する動き〕、〔特別支援学級に関する動き〕、〔交流学級担任との報告・連絡・相談内容〕等の下位カテゴリーがある。

④児童生徒の健康・安全確保関係

〔児童の課外生活の送り方〕、〔児童の自己管理行動〕、〔特別支援学級担任からの依頼〕、〔児童への忠告内容・約束事〕、〔医療的ケア対象児周囲の児童に関すること〕、〔支援員から特別支援学級担任に伝えた児童の情報〕、〔教頭・コーディネーター・教育委員会関連者からの助言内容〕等の多くのカテゴリーの中に、〈児童の危険行動〉、〈児童の危険回避行動〉、〈児童の危険行動と事故防止対策〉、〈医療的ケア対象児に危害を加え得る他児童の行動〉、〈支援員が捉えた児童の危険な行動〉等、児童の安全管理に必要な項目がある。また、〔支援員から特別支援学級担任に伝えた児童の情報〕に〈医療的ケア対象児の身体状況〉、〈吸引の他の医療行為に関すること〉、〈保護者の医療行為に関する考え〉、〈安全に配慮した特別支援学級の教室の環境〉等の項目がある。そして、〔医療的ケア対象児の医療的ケアに関する情報〕のサブカテゴリー内には、〔医療的ケア対象児の身体の状態〕、〔医療的ケア対象児の自己管理行動〕等、吸引処置に限らない健康管理上必要な情報の下位カテゴリーがある。

さらに【身体の管理・支援上必要な情報】において、〔罹患・受傷のリスクに関する情報〕、〔児童の身体の状態(医療的ケア対象児に限らない)〕の下位カテゴリーがあり、【通常学級の児童対応に必要な情報】には〈医療行為を要する通常学級の児童への対応〉、〈養護教諭不在時の通常学級の児童の保健室対応〉、〈通常学級の児童の心身状態〉の下位カテゴリーがある。

⑤運動会(体育大会)、学習発表会、修学旅行等の学校行事における介助

支援員が項目化したデータには、〈学校行事の予定と支援学級児童の動きの予定〉、〈学校行事の際の教師と支援員の動き〉、〈授業・行事の際の特別支援学級児童の動き・配慮〉、〈学校行事の際の養護教諭と支援員の役割分担〉等の項目がある。

⑥周囲の児童生徒の障害理解促進

支援員が項目化したデータに、〈特別支援学級児童に対する通常学級児童の関わり方〉、〈医療的ケア対象児の自立を妨げ得る他児童の言動〉、〈医療的ケア対象児に対する他児童の協力状況〉等の項目がある。

⑦その他:①～⑥に分類不能な特徴的データ

- ・【情緒面での支援上必要な情報】の下位カテゴリーがある。
- ・【社会性構築への支援上必要な情報】の下位カテゴリーがある。
- ・【特別支援学級の他クラスの児童対応に必要な情報】、【特別支援学級担任との連携内容】、【担任の他の職員との連携内容】で構成される『学校組織の一員として携わる責任上必要な情報』のカテゴリーがある。

3) データおよび1)の結果を「看護の目的」および「看護の機能」の視点で分析した結果

データおよび1)の結果を、「看護にかかわる主要な用語の解説」(日本看護協会, 2007)における「看護の目的」および「看護の機能」の視点で分析した結果は、次の通りである。

①看護の目的の視点

学校全体児童を看護の対象としていたと捉え得る、[児童の身体の状態(医療的ケア対象児に限らない)]、[通常学級の児童の心身状態]、[医療的ケア対象児の身体の状態]などの下位カテゴリーがある。また、健康の保持増進、疾病の予防を念頭においていたと捉え得る、[罹患・受傷のリスクに関する情報]、[児童の自己管理行動]の下位カテゴリーや、<児童の危険行動と事故防止対策>などの項目がある。そして、身体的・精神的・社会的支援を念頭においていたと捉え得る【身体管理・支援上必要な情報】、【情緒面での

支援上必要な情報】、【社会性構築への支援上必要な情報】のサブカテゴリーがある。

②日常生活への支援の視点

学校での児童の日常生活上の支援がなされたと捉え得る、【学校の動き】、【学習生活・学校生活上の気づき】から構成される『学校生活の流れにおける児童の状態』のカテゴリーがある。

③診療の補助の視点

【医療的ケア対象児の医療的ケアに関する情報】のサブカテゴリーがある。また、[医療行為を要する通常学級の児童への対応]の下位カテゴリーがある。

④相談・指導・調整の機能の視点

[児童の自己管理行動]、[医療的ケア対象児の自己管理行動]の下位カテゴリーがある。また、[支援員から特別支援学級担任に伝えた児童の情報]、[特別支援学級担任と相談・検討した内容]の中に、<保護者の医療行為に関する考え>、<保護者との相談内容>、<保護者の考え・希望・相談内容>があり、相談・指導の何らかの機能遂行が図られたことが捉え得る。

そして、『学校組織の一員として関わる責任上必要な情報』のカテゴリーがあり、他職種との協働で児童の生活環境を整えるための何らかの機能遂行が図られたことが捉え得る。

表2. 「看護の目的」および「看護の機能」

<p>「看護の目的」</p> <p>看護は、あらゆる年代の個人、家族、集団、地域社会を対象とし、対象が本来もつ自然治癒力を発揮しやすい環境を整え、健康の保持増進、疾病の予防、健康の回復、苦痛の緩和を行い、生涯を通して、その人らしく生を全うすることができるよう身体的・精神的・社会的に支援することを目的としている。</p>
<p>「看護の機能」</p> <p>身体的・精神的・社会的支援は、日常生活への支援、診療の補助、相談、指導及び調整等の機能を通して達成される。</p> <p>日常生活への支援とは、対象者の苦痛を緩和し、ニーズを満たすことを目指して、看護職が直接的に対象者を保護し支援することであり、保健師助産師看護師法第5条の「療養上の世話」に相当する。</p> <p>診療の補助とは、医学的知識をもって対象者が安全かつ効果的に診断治療を受けることができるように、医師の指示に基づき、看護職が医療処置を実施することであり、同条の「診療の補助」に相当する。</p> <p>相談とは、対象者が自らの健康問題に直面し、その性質を吟味検討し、対処方法や改善策を見出し実施できるように、また医学診断や治療について主体的に選択できるように、看護職が主に言語的なコミュニケーションを通して支援することである。指導とは、対象者が問題に取り組み、必要な手立てを習得したり、活用したりして、自立していくことができるように、看護職が教える活動のことである。調整とは、対象者がよりよく健康生活を送ることができるように、看護職が他の職種と共同して環境を整える働きをいう。相談、指導、調整には、同条の「療養上の世話」「診療の補助」の両方が関わっている。</p>

日本看護協会(2007):「看護にかかわる主要な用語の解説」第Ⅱ章 1看護, pp10-13 より抜粋

⑤その他:①～④に分類不能な特徴的なデータ

- ・【児童の学習生活・学校生活上の気づき】、【基本的生活習慣確立への支援上必要な情報】、【身体管理・支援上必要な情報】、【情緒面での支援上必要な情報】、【社会性構築への支援上必要な情報】、【医療的ケア対象児の医療的ケアに関する情報】のサブカテゴリーや〔支援員から特別支援学級担任に伝えた児童の情報〕、〔特別支援学級担任と相談・検討した内容〕の下位カテゴリーを構成するデータのほとんどが、児童ら個々の心身状態や行動、状況に関する情報である。
- ・【情緒面での支援上必要な情報】の下位カテゴリーには、〔不安定な児童の状況と影響要因〕、〔児童との情緒面でのかかわり〕があり、支援員の意図的なかかわりや児童の変化を報告し合う必要性が認識ゆえのデータと捉え得る。
- ・〔特別支援学級担任と相談した支援員の心境〕を構成するデータに、〈教職でない支援員ゆえの不安〉、〈至らなさに関する申し訳なさ〉、〈児童への対応方法の不透明さ〉がある。

考察

1) 看護師が支援員として従事することの「特別支援教育」への貢献可能性と課題

看護師免許を有する支援員がその強みを活かしながら、特別支援教育を支援する立場としてどのように貢献でき、どのような課題があるのかについて考察する。

①「観察」を通した「児童の健康・安全確保」「基本的生活習慣確立のための日常生活上の介助」

特別支援教育支援員には、教育現場の様々な場面において一人一人の教育的ニーズに応じた適切な配慮が求められる中で、子どもたちの日常生活上の介助や安全確保、学習活動上のサポートを行いながら、学級担任や学校を支えていくことが期待されている。すなわち教職員と連携しながら、教育現場で起こる様々な日常生活の補助者として、教師の目や手が届きにくい部分を支援しながら、子どもたちへの支援を充実させていくという役割を担う(齋藤, 2010)。今回、支援員のデータは、大きく『学校生活の流れにおける児童の状態』『特別支援学級の児童の生活を支援する上で必要な情報』『学校組織の一員として携わる責任上必要な情報』にカテゴリー化されたことから、支援員は、特別支援学級児童が送る学校生活を把握しつつ、学校組織の一員としてその責任を担うべく携わっていたことが明らかである。そして、〔支援員から特別支援学

級担任に伝えた情報〕を構成した項目から、児童たちのことに関して、教師の目や手が届きにくい部分での気づきや児童の行動、保護者からの情報等を、特別支援学級担任および支援員間で共有して児童を支援していたことがわかる。

研究結果2)の視点でみると、特に「④児童生徒の健康・安全確保関係」での情報共有が多くなされていた。すなわち、医療的ケア対象児に限らない児童たちの、身体の状態、自己管理行動、危険な行動、罹患・受傷のリスク等を捉えて、児童たちの健康・安全確保に努めていたことが明らかである。さらには、通常学級の児童への健康・安全確保面での対応が求められた経緯があることもわかる。そして、「①基本的生活習慣確立のための日常生活上の介助」の点において、これを担うための具体的な児童の動作や自立の程度等の情報が、支援員間で共有されていた。

これらの傾向より、看護師は支援員として、児童たちの健康・安全確保と基本的生活習慣確立のための日常生活上の介助を担う上で、児童たちの状態や動作、行動、事故や疾病につながり得るリスク要因等を、具体的に観察し、教職員間で情報共有しながら、その役割を十分に遂行していくことができる立場にあると考えられる。これは、研究結果3)「①看護の目的」の視点からみても、児童たちの心身の状態を捉えて、健康の保持増進、疾病の予防に努めようとする看護師の役割意識によっても裏付けられよう。さらに、支援員が児童たちの心身状態や行動等を具体的に観察しているのは、ナイチンゲールの「看護は観察で始まる」の言葉がある通り(菱沼ら, 2009)、看護師には、人々の個々の状態と周囲の状況を意図的に観察することが習慣づけられているゆえんともいえるだろう。看護業務基準においても、「看護を必要とする人を継続的に観察、健康状態や生活状況を判断することによって、重要な徴候を識別し、適切な対策を講じる」ことが義務付けられており(日本看護協会, 2007)、支援員らは、支援に活かすべく「観察」によって捉えた情報を共有しようと努めていたことが推察できる。加えて、「小児看護領域の看護業務基準」におけるこの項においては、「健康障害の状況に応じた治療、処置が受けられるよう援助を行うとともに、子どもの成長・発達にふさわしいセルフケア能力が開発されるよう支援する」とあり(日本看護協会, 2005)、支援員は、看護の役割としても、児童の基本的生活習慣確立の日常生活上の介助を担っていたことが推察できる。さらには、医療的ケア対象児の自己管理行動に関するデータもあり、このセルフケア能力の開発を含んだ対象児の日常生活習慣確立へ関わろうと努めていたと捉えられる。

② 発達障害の児童生徒に対する学習支援を担う上での課題

次に、発達障害の障害特性を踏まえた学習支援に関することを考察する。

研究結果2)における「②発達障害の児童生徒に対する学習支援」にある通り、支援員が項目化したデータには、学習上の障害の特性に応じてどのような方法で学習支援をしたのかに関する項目は見当たらない。しかし、児童の学習上の困難性や学習成果に視点が向けられている項目や学習に関連する発達障害ゆえの行動傾向に関する項目はある。すなわち、発達障害のある児童たちであることを踏まえた、学習にまつわる児童の言動や学習成果を意図的に「観察」している。しかし、その観察結果をどのように学習支援に活用したのか、担任や支援員のどのような支援が児童の学習支援として効果的であったのか等についての情報交換がなされた経緯は、データ上にはない。これは、看護師である支援員が教育の専門性に浅いゆえに、意図的にかかわり難い部分であるのかもしれない。一方で、障害のある子どもと家族に関わる看護者は、あらゆる側面から子どものアセスメントを行い、子どもの健康状態を総合的に捉えて適切な援助をしていくことが求められる。たとえば、注意欠陥多動性障害のある子どもの看護において次のようなポイントが示されている。それは、子どもの状況にあわせて課題達成に至るまでの過程を時間で区切ったり、子どもに要求する事柄を少なくしたりして、やるべきことに自分で気づけるよう工夫して関わる治療教育的対応や、成功体験により達成感を与え自己評価を低くしないように関わることの重要性、刺激の統制、事故防止などである(山崎, 2005)。すなわち、「子どもの看護」を担う者は、個々の障害を理解し、「子どもの教育」に携わるべくその知識や技術を高めていかなければならない。とはいえ、一般的に考えて看護師は「学校教育」の目標やそれを果たすための仕組みや方法に関する知識は浅い。したがって、この部分の解決が課題であるといえる。具体的には、「教師らが、障害のあるその児童と特別な配慮を要する学習生活上の支障をどのように捉え、その学校の教育課程の中で、教科や教科外の教育を通して、児童たちの中にどのような力が備わることを目指しているのか。その時その場でその児童に、何をどのように習得させたいと考えているのか」といったことを、看護師である支援員は把握していく必要があるといえよう。

一方で、支援員は「情緒面での支援上必要な情報」や「社会性構築への支援上必要な情報」を多く情報交換していた。これらの中に、不安定さや対人関係の困難さ、それらへの対処といったデータがあり、支援員が、児童たちの

障害があるゆえの社会生活の送り難さや伴う辛さを最小限にできるようかかわった中で得られたデータであるものと思われる。看護は人の生き方に寄り添い、生きることそのものを支え、勇気づけ、その人がもつ力を高めて健康に生活できるようにサポートしていく専門職であり、その看護の役割は良好なコミュニケーションに裏打ちされた人間関係の中で発揮される(深井ら, 2006)。このような役割を担う看護師が、児童を理解し、児童を変化させ得る意図的なコミュニケーションを通して情緒面の支援に貢献し得ることも示唆された。ただし、支援員のデータでは、言葉づかいや下品な行動、危険行動に対して「忠告」している。支援員は「行動を改善しなければ」「学校生活に適應できるようにしなければ」という思いで逐一指示や注意を行い、コントロールしてしまう傾向があるが、子ども自身が自分をコントロールし、自ら考え、生きていく力をつけていけるように応援することこそが、特別支援教育支援員の役割である(齋藤, 2010)。看護にも教育にも求められる援助的コミュニケーションを通して、児童ら自らが望ましい言動を獲得していくことができるよう、その具体的方法を教師らと共に見出ししていくことも、看護師である支援員の貢献可能性として大きいといえるだろう。

なお、国立特別支援教育総合研究所(2013)は、「インクルーシブ教育システムにおける教育の専門性と研修カリキュラムの開発に関する研究」の中で、特別支援教育支援員に必要とされる資質・能力を育成するための研修の観点を、次のようにまとめている。「各種障害種における障害の特性に関わる知識」、「介助に関わる知識と技能」、「教材教具に関する知識と技能」、「学習指導・支援に関わる知識と技能」、「子どもの精神面での支援に関わる知識と技能」、「きめ細かに教室内で子ども及び教員の動きや関係性を観察する視点」、「学級担任、他の教職員や特別支援教育支援員との情報交換および連絡・調整ができること」。これらをみると、看護師が支援員として貢献するためには、述べてきた看護師であるゆえの強みを存分に発揮しつつ、そのレディネス有効活用した研鑽を重ねていくべき観点が多いことがわかる。

2) 看護師が学校という場で児童にかかわることの「看護」としての意味と課題

看護は、あらゆる年代の個人、家族、集団、地域社会を対象としている。そして、看護の活躍する場は、プライマリヘルスケアやヘルスプロモーションの考え方の普及や医療環境の変化に伴って医療施設から地域へと拡大し、多様な場においてそれぞれの場の特徴や使命を受けて、どのような看護が必要であるかを把握して適切な援助を

行っていくことが求められている(野嶋, 2012)。その看護活動の展開の場の一つとして学校を捉え、学校の中で看護職が携わることの意味を文献に基づいて以下に考察する。

① 看護師の職業倫理に基づいた使命と責務

看護師免許を有する者には、どのような場や立場にあっても、一看護者として職業倫理に基づいた責務を果たすべき使命がある。日本看護協会が「看護者の倫理綱領」を定めており、特に「1. 看護者は、人間の生命、人間としての尊厳および権利を尊重する。」「6. 看護者は、対象となる人々への看護が阻害されているときや危険にさらされているときは、人々を保護し安全を確保する」とある。この中で、看護者は人々の健康と生活を支える援助専門職であり、人間の生と死という生命の根源にかかわる問題に直面することが多く、その判断および行動には高い倫理性が求められることが明示されている。そして看護が阻害されているときや他者による不適切な判断や行為に気づいたときに、人々を保護するために働きかけたり問題解決に向けて行動したりすべきことも明示されている(日本看護協会, 2003)。したがって看護師は、学校における支援員という立場においても、看護の責務と共通する児童たちの健康・安全確保のために努めるべく使命を有するといえる。

また、「小児看護領域の看護業務基準」における「看護を必要とする人を継続的に観察し、判断して問題を予知し、対処する」項においては、「健康障害の状況に応じた治療、処置が受けられるよう援助を行うとともに、子どもの成長・発達にふさわしいセルフケア能力が開発されるよう支援する」「健康障害による外見や行動の変化、子どもの成長・発達の過程に及ぼす影響を予測し、養育者が学校の教員、保育士、保健師、訪問看護師、ケースワーカーなどから支援が得られるよう調整する」するなどが明記されている(日本看護協会, 2005)。したがって、障害のあるその児童の心身の状況やなされている治療・処置を把握し、その子どもの成長・発達の過程に及ぼす影響を予測して、セルフケア能力開発に向けた必要なかわりを教師らと協働で担っていかなければならない。具体的には、次のような役割を果たす必要があるだろう。その子どもの心身機能や生活行動に関する看護の視点からのアセスメントを通して、必要な健康観察の視点や、セルフケア能力開発を踏まえた個別の保健指導の内容や方法に関する意見を述べていく必要がある。その上で検討された個別の教育支援計画や指導計画に基づいて、児童に関わる学校組織の一員として必要な役割を担っていく責務があるといえる。

② 地域看護の展開の場の一つとしての学校看護

小児医療の進歩により、治療を受けながら地域の学校に通う慢性疾患時は増えており、QOLの向上を目指して、子ども・家族・教師・医療従事者の協働による通常学級における慢性疾患児の教育支援が求められている(谷川, 2014)。本研究における支援員のデータの中にも、「[児童の身体の状態(医療的ケア対象児に限らない)]と分類された項目があり、この通りに「医療的ケア」を必要とせずとも、学校における「看護」は、より求められてくるものと思われる。病気や障害を持つ人々が病院から施設や在宅へ、在宅から病院や施設へと生活の場が変化しても、一人ひとりに一貫性をもって実施する継続看護は重要である(斎藤, 2008)。

ここで、地域看護の視点に触れておく。金川(2008)は、「看護の仕事は様々な健康レベルの人々を対象に症状や苦痛を緩和し、日常生活や地域社会に適応できるように援助すること、人々の成長や発達を助け、その人らしい生活が遂行できるように手助けすること」とし、地域看護の活動においてもこの考え方は同様としている。さらに、地域住民には学校や職場で過ごす時間が生活の中心を占めている人々が多いことを踏まえ、これらの場を対象に含めた幅広い活動が必要としている。

なお、学校における看護活動においては、発育発達途上の子どもと学校という場の十分な理解が欠かせない。(岡田, 2013)は、学校看護は、一般的な看護をそのまま導入したり、簡潔にしたりするのではなく、対象となる子どもが健康であることを十分理解した上で、学校という教育の場の背景や特徴を踏まえた支援に特化していく必要があるとし、教育の場において学習を継続するための支援であること、支援そのものが教育的な営みであることを踏まえて展開される必要性を述べている。また鈴木(2014)は、養護教諭養成課程の中に「地域看護学(公衆衛生看護学)」を位置づけ、学校・家庭・地域で出現するさまざまな人間の生きざまに直接間接に介入し、一次予防も含めた組織対応を企画・立案・実践していく専門領域とし、次のような教育的意義を述べている。すなわち、国民自らの生涯にわたる生きる力を支える生涯保健・生涯教育の立場から、福祉・医療・保健・心理、そして生活環境から地球環境に至るまで、生活生存の場としての学校、家庭、地域、人間生態系としての視点を導入した公衆衛生看護を、学校教育上の課題解決に導く新たな視点として、未来を担う成長過程の子どもたちの命を支える教育的意義を述べている。これらの見解は、学校という場の看護は、教育的意義を追求すべく展開される視点を示してくれる。

一方で、特別支援教育における個別の教育支援計画は、各教育機関のつながりである「縦の連携」のみならず、

各ステージにおける関係機関の「横の連携」の中で検討される(大伴, 2012)。医療や看護を必要とする児童の教育支援計画は、学校医、主治医などと、保健所や訪問看護ステーションなどで活躍する看護職等との連携の中で検討される。学校においても、看護の継続性の中で地域看護の一部を担っている認識のもと、教育活動が円滑になされるための支援が求められているといえる。

結論

本研究から導き出された、看護師が通常学校における特別支援教育支援員として従事することの貢献可能性と課題は以下の通りである。

①学校における「特別支援教育」が円滑になされるために、「観察」を通した「児童の健康・安全確保」「基本的生活習慣確立のための日常生活上の介助」の部分について、看護の強みを活かして貢献することができる。すなわち、児童の健康・安全・日常生活面において、看護師である支援員は意図的に「観察」し、健康の保持増進と安全確保への能動的な関わりをすることができる。そして、セルフケア能力の開発を踏まえつつ、児童の健康障害の状況に応じた日常生活習慣確立を目指しながらの日常生活上の介助の点においても、情緒面での支援においても、貢献できる部分が大きい。

②発達障害の児童生徒に対する学習支援を担う上で、障害の理解や伴う生活上の困難さが理解できる立場ながら、学校教育の目標やそれを果たすための仕組みや方法に関する知識は浅い。この課題解決と共に、教師らが、児童らの学校における学習生活上の支障をどのように捉え、教育課程の中でその時その場におけるその児童に習得させたいとしている力を積極的に把握する努力が求められる。

③看護師が支援員という立場にあっても、学校において看護者としても携わる使命を有する。また、地域看護の展開の場の一つとして学校という場を捉え、地域看護の一部を担っている認識のもと、教育活動が円滑になされるための看護的支援に携わる必要がある。

④本研究では、看護師が特別支援教育支援員として関わることの意味や課題について、主に職務や責務の観点から述べてきた。今後は、看護師である支援員が関わったことに伴う児童の変化を踏まえた、児童にとっての意味を見出すことが課題である。

⑤本研究における支援員の取り組みは、これらの共通点が多いゆえに、意味を成した部分が大きい。インクルーシブ教育システムが追求されていく今後、職業の枠を超えた看護の中にある教育学、教育の中にある看護学等の追究が課題と思われる。

文献

- 深井喜代子・前田ひとみ(2006): 基礎看護学テキスト EBN 志向の看護実践. 南江堂, 東京, p40.
- 菱沼典子・井上智子・武田利明編(2009): 看護の原理 ケアすることの本質と魅力. ライフサポート社, 横浜, p228.
- 金川克子(2008): 地域看護学の成立基盤. In: 最新保健学講座1 地域看護学概論(金川克子編), メヂカルフレンド社, 東京, pp6-7.
- 国立特別支援教育総合研究所(2013): インクルーシブ教育システムにおける教育の専門性と研修カリキュラムの開発に関する研究.
<http://www.nise.go.jp/cms/7,8611,32,142.html> (2014.6.10 検索).
- 文部科学省 初等中等教育局特別支援教育課(2007): 「特別支援教育支援員」を活用するために.
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/002.pdf (2014.3.21 検索).
- 文部科学省(2011): 特別支援学校等における医療的ケアへの今後の対応について.
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/attach/1314530.htm (2014.3.21 検索).
- 文部科学省初等中等教育分科会(2012): 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告) 323733_8.pdf.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/houkoku/1321667.htm (2014.6.10 検索).
- 日本看護協会(2005): 小児看護領域の看護業務基準. In: 日本看護協会看護業務基準集(日本看護協会編), 日本看護協会出版会, 東京, pp30-35.
- 日本看護協会(2007): 看護業務基準. In: 日本看護協会看護業務業績集 2006 年改訂版(日本看護協会編), 日本看護協会出版会, 東京, p11.
- 日本看護協会(2003): 看護者の倫理綱領.
<http://www.nurse.or.jp/nursing/practice/rinri/pdf/rinri.pdf> (2014.3.21 検索).
- 日本看護協会(2007): 看護にかかわる主要な用語の解説 概念的定義・歴史の変遷・社会的文脈.
<https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/2007/yougokaisetu.pdf>, pp10-13 (2014.5.25 検索).
- 野嶋佐由美(2012): 看護とは. In: 看護学基礎テキスト第 1 巻 看護学の概念と理論的基盤(野嶋佐由美編), 日本看護協会出版会, 東京, pp5-9.
- 岡田加奈子(2013): 学校看護とは. In: 養護教諭、看護師、保健師のための学校看護 ―学校環境と身体的支援を

- 中心に一(岡田加奈子・遠藤伸子・池添志乃編著), 東山書房, 京都, p13.
- 大伴 潔(2012): 関係機関の把握. In: 「特別支援学級」と「通級による指導」ハンドブック(全国特別支援学級設置学校長協会編), 東洋館出版社, 東京, p272.
- 斎藤恵美子(2008): 地域看護学の構成. In: 最新保健学講座1 地域看護学概論(金川克子編), メヂカルフレンド社, 東京, pp36-37.
- 齋藤まり子(2010): 特別支援教育支援員とは. In: 特別支援教育支援員ハンドブック(庭野賀津子編), 日本文化科学社, 東京, pp2-3.
- 清水史恵(2014): 通常学校において医療的ケアに関わる看護師の配置や雇用状況の全国調査 一教育委員会を対象として一. 小児保健研究 **73**, 360-366.
- 鈴木路子(2014): 人間のよりよい成長を育む「公衆衛生看護学(地域看護学)」の再構築. In: 教育の基礎としての公衆衛生看護ノート(鈴木路子編著), 教育家庭新聞社, 東京, pp31-50.
- 谷川弘治(2014): 病弱. In: キーワードブック障害児教育 一特別支援教育時代の基礎知識改訂増補版(清水貞夫・藤本文明編), クリエイツかもがわ, 京都, p206.
- 泊 祐子・竹村淳子・道重文子ら(2012): 医療的ケアを担う看護師が特別支援学校で活動する困難と課題. 大阪医科大学看護研究雑誌 **2**, 40-50.
- 山崎智子監修(2005): 明解看護学双書4 小児看護学. 金芳堂, 京都, p334.

The Possible Roles and Issues of Contribution of the Nurses as a Special Needs Education Support Staffs in the Normal School: Analysis of the Contact Notes

Yuko HONDA

School of Education, Tokyo University of Social Welfare (Isesaki Campus),
2020-1 San'o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

Abstract : While we explore the diffusion of “Inclusive education system” philosophy and the way of its embodiment, the present research aims at offering any implications by collecting contact notes exchanged between licensed nurses supporting children in disorder/handicap in a particular normal school incorporating special needs education and thereafter analyzing from the methodology of discourse analysis on the contact notes mainly. Implications include the following points: 1) due to the specially trained observational competence attained by experienced nurses -- what we call as “purposefully attentive nursing-oriented observational skills” -- they actually exercise keenly effective care orientations over the children in disorder/ handicap and taking into account children’ s self-care ability, experienced nurses can support their co-educational settings in normal schools compatible with establishing life habits in accordance with the condition of disorder/handicap. 2) On the other hand, nurses, who function as staff members expanding their horizon to offer, involving in the special needs co-educational program, reveal a certain lack of knowledge about the objectives of school education, its whole structure and the way of administration. In short, nurses in support of children in disorder/handicap enrolled in normal schools need to better understand pedagogical perspective towards those children which are represented by teachers’ orientations within the curriculum. Finally, licensed nurses need to support the educational activity smoothly, with nursing mind and self-consciousness of responsibility as part of community nursing.

(Reprint request should be sent to Yuko Honda)

Key words : The role of special needs education staff, Responsibility of nurse, The objectives of school education, School nursing

